

は一人もなかつた。彼の一生は實に「チン」に懸けられた一生であり、この一言を語るための六十年であつたのだと私は思ふ。

思へば恐ろしい藝道である。(一六、四、一五)

豊竹巖大夫追想

本誌同人 内田富太郎

五十義會春季大會の二日目、春雲暗澹たる帝大病院の一室に豊竹巖大夫が遂に永眠した。

去年東劇十二月興行「賀の祝」の床淨瑠璃を最後の舞臺として。裸言すれば、故人は生前随分敵の多い人だつたが、私は妙に鬭争的な強鋭さを持つ人間性に魅き付けられた。一部の人から毛嫌ひされてゐたあの鼻張りの強さも今にして思へば、江戸つ子氣質を潜在させてゐて面白かつた。それと新派の巨星亡き伊井荃峰にどこか似てゐたことも懐かしめた一因である。

○

始めて私が巖大夫に逢つたのは肌寒い去年の二月のある夜、神田錦橋閣の素玄淨曲研究會の感想交換會で、岡田博士に紹介された時だつたと記憶してゐる。

如才のない故人は若輩な私を促へて「何か内の雑誌にも書いて下さい」。

と例のテキパキした調子で浴びせかけた。齒切れのいゝ快調につい引き込まれて「え」と私はモゴ／＼返事したのである。

彼は其の晩、素玄會の爲めに猿轅の絃で「鰻谷」を語つた。それを先輩河野國聲氏が江戸前の「妻八」だと適評した。巖大夫と「鰻谷」これは妙に印象に残つてゐる。

青年歌舞伎が解散する少し前のことだからモウ四五年だつたと思ふ。新宿の第一劇場で訥升のお妻、我當の八郎兵衛で「鰻谷」を出した。

樂に近い某日、巖大夫は新橋演舞場の或る舞踏大會と掛持してゐた爲めに、演藝場の時間の狂ひから青年歌舞伎の開幕時刻に間に合はず大穴を開けて了つた。これが樂屋の問題となつて我當、勘彌の若手連が憤激の餘り結束して、松竹に青年歌舞伎と巖大夫の絶縁を迫つた。幸ひに、パトロン格の井上松竹重役と演舞場の故川村社長の調停斡旋で短月の謹慎で巖は青年歌舞伎へ復歸出來た。流石の彼もこの時は實に従順に非を認めて鬭志を現はさなかつたらしい。

其の曰く付の「鰻谷」はこれまで聴いた彼の床語り物中で、私には一番印象深かつた。巖の持つ根強い精力的

な個性が愛慾の慘劇を生む情痴的な「妻八」に溶け込んで意外な位成果を収めた。權十郎の彌兵衛も練巧で味があつたが「見知つて置いて貰はうと」……で強惡に迫る傍若無人さ。

お妻の「心に泣けど目に泣かぬ」……の惻々と胸打つ情愁。そして一番傑れてゐたのは段切れであつた「心そゞろに鳴る鐘は」……で亂動する激情を一杯に表現して「四つ橋指して」……で悲壯な決意を脈流させる藝韻が、我當の熱伎と俱に核心に食ひ入つた。

素淨瑠璃で聽いた時には「慾に引つばる熊手性」の母親は、カツキリ憎し味が利いて「慮外乍ら娘には」……のトゲ持つ表現など眞を穿がつ偽惡振りを好描した。

それと擴聲器も用ひずに、ダダ廣い兩國の國技館の有名會に、十五六年前出演して紋左衛門の絃で「野崎」を惡びれもせず堂々語りまくつた度胸には一驚させられたキメの細い深韻や恍惚とさせる風情には乏しいが、寫眞の鋭さを内有する手堅い描線を持つてゐた。

もう一つ、淨瑠璃時報、第二百五十號記念大會の素劇「太十」の光秀が今猶眼底に明滅する。満場を呑むあの落ち付きと自信よりは板について危氣がなかつた。幸四郎風の威壓さと中車流の堅實さでどつしり運ぶ足取りが秀逸で、流石に永い床淨瑠璃生活の體驗を見事演劇的に生

かしてゐた。變な云ひ方だがその光秀は彼の「太十」より滋味があつて愉しめた。

○

初秋の冷氣が肅々と迫る九月の夜更け、谷中の坂を下りて初音町から乗つた市電に偶然、猿藏と巖が乗つてゐた。

仁左衛門「朝顔」の床を受持つて、名古屋方面から九州へ巡業に行くと云ふ話を國民服に身を包んだ、颯爽たる姿で潑刺と私に語つた。それが私としては違ひ納めになつて了つた。世評の通り彼は處世的には鋭く抜け目のない男だつたが反面支那服を着て樂屋入りするやうな派手好きでもあつた。

義大夫雜誌と云ふものは主として豊かな趣味を基調に純藝術的な定型を辿るのに彼の「淨瑠璃時報」は業界の消息報導を第一義に、ニュースの速報に主力を注いで編輯した。純藝術家の性格より事務的才能に育ぐまれた、彼らしい編輯意圖の俊敏さが特異色だつた。

發刊以來、滿洲專變、支那專變、第二次世界大戰と激動する國際國內情勢の急激に直面しても終刊まで十年以上の長期日を毎月二回の定期發行を堅持しつゝ續刊して來たことは經營的手腕の非凡さを明確に物語つてゐる彼の藝質は、おほどかな氣品、古風な深韻纖美な風情

にこそ缺けてゐたが、世話時代を堅達にコナして行く能

感させる。

附記 運筆の都合上敬稱は略した。

率的鋭さがあつた。農大夫の死は齡六十とは云へ、青年の如き滿々たる霸氣と事務的才腕を敏捷に藏してゐた彼に、其の得意とする對社會的部門に於て、義大夫文化の建設面に、未だく手腕を揮はせて見たい惜想を多々痛

僕にとつて農大夫氏は個人的交際は殆どなかつたが「淨瑠璃時報」を通じて勉強させて貰つた厚恩がある心して氏の瞑目を靜かに祈り度い。

假名手本忠臣藏の文意 二二三

本誌同人 紅 雨 莊 主 人

——大序三段目、四段目、六段目——

九月(十五年)頃でもあつたか、上野の某所で岡田氏の研究會があり私は差支へて出られないのであつたが、樋口氏の歓迎を兼ねると謂ふことなので後れて一寸顔を出した。其席で四段目の研究が有つたさうで一二の點に就て引續き意見の交換が行はれた。

其一つは「これはく力彌殿早い御出仕」は郷右衛門か九太夫かといふ問題であつた。普通は郷右衛門でやるが、古賀大彌氏であつたか自分は故ら九大夫でやつてゐるとの事で力彌に對する一種皮肉の意味で九大夫の方がよくはないかとの説が出た。然し郷右衛門が前に立ちあとに續いた九大夫が先づ聲をかけるのも一寸自然でなく寧ろ前に立つ郷右衛門が自分より前に既に力彌が出仕してゐるので、これはくと挨拶する、力彌は早い出仕の理由が晝夜相つめ罷在るを告げるそれは奇特千萬といふ風に解した方が素直であらうといふ意見に賛成が多かつた。事實九大夫はその後で郷右衛門に念の入つた皮肉を浴せてをり、力彌に迄皮肉るのは少しくどいやうであり、且つ九大夫は此場では單に色取りとして出してあ